〔研究ノート〕

安政江戸地震と黒石藩江戸藩邸

篠村正雄

はじめに

安政江戸地震の研究では、北原糸子氏が、災害への人々の対応について、社会史的分析を行い、災害情報と経済的施行について検討している。[1] 佐山守氏は、幕府の第一・二次の被害調査を分析し、町方の被害状況を明らかにしている。[2] 白石睦弥氏は、弘前藩邸の建物被害と被害者名を調べている。[3]

これらの研究では、地震の被害の考察はされているものの、死者の扱いについて明らかにされていないところから、弘前藩の死者についての検討を行い、すでに報告は済ませた。[4] 今回はその時に触れなかった支藩黒石藩について、建物・人的被害、国元への災害情報について考察する。

使用する史料「弘前藩庁日記」は、江戸日記と国日記がある。以下、「江戸日記」、「国日記」と略記する。[5]

一　藩邸と地震

(1) 黒石藩邸

黒石津軽家の初代信英は、寛永四年（一六二七）、八才で将軍に御目見し、同二〇年、二四才で番入し、幕府旗本になった。明暦元年（一六五五）、三六才で、江戸幕府より甥にあたる弘前藩四代藩主信政の後見役を命ぜられ、翌年、弘前藩から五〇〇〇石の分知を受け黒石に陣屋を構えた。慶安三年（一六五〇）、三一才の時、兄の弘前藩三代藩主信義の神田小川町の屋敷を宿所としているので、ここで後見役の任にあたっていたと考える。[6]

二代信敏が寛文二年（一六六二）九月二二日に襲封した時の屋敷は、「封内事実苑」に次のようにある。[7]

左京殿江戸屋敷、糀町天神前なり、後代本所三ッ目之内御拝領＝成麹町平河町一丁目の天神前（平川天満宮、東京都千代田区）にあったところから、小川町から移ったとみられる。

三代政兕の時は八代州河岸に屋敷があるので、天神前から移っていることになる。ここが、元禄四年（一六九一）に類焼し、田安長門守上屋敷へ移ったが、狭隘を理由に替地を願い出て鍛冶橋内堀三六郎上屋敷を拝領し、同六年、本所三ッ目通に替地になっている。[8] 宝永七年（一七一〇）九月一四日、居宅より失火して出仕を遠慮し、二四日に許されてい

る。享保四年（一七一九）正月晦日、またも居宅より失火して遠慮し、翌年二月四日に許されている。[9]

八代親足の文化六年（一八〇九）、黒石藩が成立すると、屋敷が手狭なため、添え地拝領を願い出て許可になっている。翌七年の『新板改正文化武鑑』に次のようにあって確認できる。[10]

上本所三ッ目通、大手ヨリ三十七丁余

一一代承叙（本次郎）の二か所の屋敷は、安政三年（一八五六）、安政江戸地震の後に幕府の編集した『諸向地面取調書』に記載がある。[11]

一上屋敷　本所三ッ目橋通　四千弐百九拾四坪余　津軽本次郎
拝領添屋敷　品川領戸越村　弐百弐拾坪

黒石藩江戸屋敷は、本所三ッ目の一か所であった。弘前藩戸越屋敷は文政一〇年（一八二七）、轅事件により柳原中屋敷から屋敷替えになった。[12]ここに沿岸警備の施設を置いていることから、これに関連して黒石藩の戸越村添屋敷の拝領もあったものであろう。

「金木屋日記」[13]にある安政江戸地震の際の屋敷図は、文久二年（一八六二）の『江戸切絵図』[14]と同じである。表門は西向きに建てられてあり、嘉永三年（一八五〇）、高木久蔵の「道中手帳」[15]には、門構えを見て「御門前誠に結構なり」と表現してある。[16]鬼門には稲荷があり、屋敷神とみられる。また、庭の西側には稲荷と不動尊が並んで祀られていた。切絵図の方には、屋敷の北西に辻番がある。明治三年（一八七〇）、弘前藩の本所大川端屋敷は五八一坪の内、拝領地四九一坪、抱え地九〇坪であった。拝領地は上地になったが、抱え地は黒石藩に譲渡された。[17]この後、黒石津軽家は昭和元年（一九二六）、東京阿佐ヶ谷、同一七年に武蔵境に移るが、この間の変遷はわからない。

（2）安政江戸地震

この地震は、安政二年（一八五五）一〇月二日夜四ッ時、荒川河口を震源とする陸域地震の直下型で、マグニチュード六・九、震度六であったが、津波は発生しなかったようである。死者一万人余、倒壊家屋一万四三四六軒で、火災の発生もあり、町方の被害は特に深川・浅草・本所で甚大であった。

「安政見聞誌」は、仮名垣魯文らによるルポルタージュで、翌年一〇月には書き上げ、最初は二〇〇〇部を刷っている。[18]直下型の地震で、市中の混乱した様子が生々しく描かれている。『武江年表』にも被害状況が詳しく書かれてあるが、地震直後に発生した火災は朝五ッ時には鎮火している。[19]

また、地震の大きさを●を夜、○を昼とし、その下に発生時刻を記入した表を用いている。一〇月二日には、四時・四過・九半・八トキ・八半・七トキ・七過・同（七過）・七半・同（七半）と一〇回の地震が起こっていることがわかる。余震は二九日まで記載があり、計八〇回に及んでいる。

「江戸日記」安政二年一〇月二日の天気付に次のようにある。

今夜亥の刻大地震、潰、半潰、大破損等、委細御届帳ニ有之、大地震四方出火、御屋敷御別条之、

地震発生時間を亥刻とし、後日に余震の記載があるが、回数までは触れていない。

地震情報は、黒石藩では三日に藩の飛脚が江戸を立ち、一一日夜半に黒石に届いている。江戸からの情報は、一〇月二九日、一一月三日、同五日、二四日にも伝えられている。弘前藩の場合、飛脚は平常時に一六日を要したが、今回は警護を付け一二日に着いている。情報が重要なために警護を付けていることがわかる。

各藩とも多くは藩飛脚・町飛脚に書状・摺り物を持たせ、災害情報を国元に伝えている。最も時間が掛かったのが対馬藩（長崎県）で、厳原に情報が届いたのが一一月一日になる。また、使者による場合もあった。奥州街道・宇都宮辺では一一月四日とみられるが、盛岡・弘前・米沢藩の飛脚や、陣笠を着けて馬に鞭を当て走り抜ける者があり、東海道・吉原宿では早打ちの飛脚三〇〇人が通過していて、当時の緊迫した様子が理解できよう。(20)

二　黒石藩邸の被害

第一に地震における建物被害をみていく。黒石藩が幕府へ届け出た被害の状況は、「国日記」安政二年一〇月二〇日に次のようにある。

去ル二日夜江戸表大地震ニ而本次郎居屋敷大破損ニ相成、同三日御用番様江御届面左之通、

一、玄関并書院向奥向不残潰申候、
一、表座敷二間半梁二階附北之方三十三間一棟潰申候、
一、裏平長屋三間半梁拾八間余潰申候、
一、表門、裏門共別条無御座候、
一、火之見櫓別条無御座候、
一、内玄関、中ノ口、勝手方役所、台所等悉破損仕候得共潰不申候、
一、表長屋三間半梁二階附弐拾弐間一棟破損仕候、
一、中長屋三間半梁拾弐間一棟破損仕候得共潰不申候、
一、北長屋二間半梁拾壱間先別条無御座候、
一、同所続厩九間別条無御座候、
一、土蔵四ヶ所破損仕候、
一、家中男子壱人死失仕候、
一、仲間弐人同断、
一、怪我人弐人、

右之通今便申来候間、此段申上候、以上、

十月　　唐牛儀右衛門

右之通申出、達之、

地震の翌日に被害状況を幕府に届けているが、これは、黒石藩が飛脚で国元へ伝え、そこから弘前藩庁に報告したものである。江戸城では地震発生時に将軍家定が吹上に避難し、その後に諸大名が御機嫌伺いに登城している。翌三日に大目付触で、在府・在国に関係なく将軍へ御機嫌伺いをするよう布令を出し、幕府の方からは使番を各大名屋敷へ派遣し、建物被害と大名とその家族の安否を尋ねている。弘前藩へは三日の暁に上使として御使番酒井織部が訪れ、変事に付き返礼には及ばないと口上を述べている。用人兼松伴太夫が玄関白砂において、この見舞いに対応

している。黒石藩にも同じように使番が訪れたものと思われる。

次に「金木屋日記」を見ていく。山一金木屋は本町（弘前市）に質店を開き、藩の御用達に任ぜられるほどの豪商であった。武田又三郎敬之も質屋・酒屋を営んでいたが、文化・文政期（一八〇四～一八二九）には衰退し、賀田（同市）へ移住して、酒屋を続けている。別家にカネキ金木屋がある。「金木屋日記」は、敬之による天保八年（一八三七）から慶応元年（一八六五）までの記録である。藩政に関しては家老大道寺家、商取引の相場は青森・黒石・五所川原・鰺ヶ沢の商家から広く情報を集めている。

この日記の三か所に建物被害の記述がある。

①安政二年一〇月一三日条

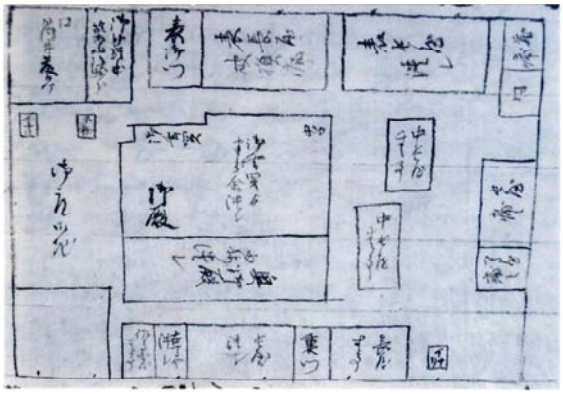
江戸大地震之事、今日倅大道寺様ニ罷上リ承候処、（中略）黒石御屋敷御殿も倒壊候よし、

②一〇月二四日条

黒石入五ゟ申参候、（中略）先便申上候通、江戸九日出候飛脚痛場所申参、御殿向不残相潰レ申候間、莫大之御物入増ニ相成、扨々恐入候事と存候、

③一一月二四日条

右黒石御屋敷図書写也、御殿共潰れ処多候得共怪我人不足候也、能逃追ふせ候義也、



黒石藩江戸藩邸屋敷図

右之通申来たる、

敬之の倅が大道寺家へ出かけ、弘前藩江戸藩邸から国元へもたらされた死者の名簿など確実な情報を入手している。他に江戸の医者手塚元端から別な死者の名簿を入手している。一一月二九日には「江戸町中江戸人斗書上」から、町名と人的被害状況を克明に書き写している。「御府内御屋敷方市中道地震類焼場所明細書」・「街道筋近郷口書」も見ていることがわかる。他に江戸で上梓した「関東五街道大地震出火場所」・「江戸大地震末代噺の種」の絵図までを、丁寧に書き写して収録している。地震から二か月足らずのうちに、江戸の出版物を見ていることになる。

また、黒石藩の飛脚が国元へもたらした情報を、柳屋斎兵衛の別家入五正から得ている。入五正は敬之の子息慶三郎の養子先で、妻と姻戚関係にあった。[21]

「国日記」と「金木屋日記」の屋敷図から、建物被害を表（1）にした。

表(1)　黒石藩江戸藩邸被害

建　物	国日記	金木屋日記
表門	無事	無事
裏門	無事	無事
玄関	全壊	半壊
内玄関	半壊	—
中の口	半壊	—
御殿（書院・表座敷）	１棟全壊	半壊
奥御殿	全壊	全壊
勝手方役所	半壊	—
台所	半壊	—
表長屋	１棟半壊、北部分・無事	南部分・半壊、北部分・全壊
裏長屋	全壊	南部分・全壊、北部分・無事
北長屋	無事	半壊
中の長屋	１棟半壊	２棟無事
火の見櫓	無事	—
厩	無事	半壊
古厩	—	全壊
作事小屋	—	無事
土蔵	４か所半壊	２か所半壊

両者の違う点は、玄関・御殿・長屋（表・裏・北・中）・厩・土蔵である。「国日記」に記載の無いのが古厩・作事小屋であり、「金木屋日記」に無いのが勝手方役所・台所・内玄関・中の口・火之見櫓である。前者は地震の翌日に幕府へ提出した報告であり、後者は一一月下旬に人的被害と建物被害を黒石に伝えたものであり、確認した時点の差であるとみられる。

「西谷平兵衛日記」は近江商人の流れをくみ、前町（黒石市）において、山ウの屋号で呉服商を営む西谷平兵衛の嘉永元年（一八四八）から安政四年までの記録である。[22] 安政二年一〇月一二日に、次のようにある。

今暁前御飛脚到着、去ル二日朝四ッ時頃、江戸大地震ニ而、爰元御屋舗も御殿廻其外半潰大破損、長や〳〵同断、却而惣潰同様之事、右飛脚即日九ッ時出立折砌、弐丁斗之間潰家のや祢の上斗多分歩行致候由、四方八方出火、夥敷相見得候由、厳敷事候、臨時飛脚ニ而相知連可申、

これは黒石藩の飛脚からの情報であり、地震の発生時間を朝四ッ時とするが、実際は前夜の四ッ時になる。三日の九ッ時に四方から火の手の上がる中、潰れ屋の上を二丁歩いて江戸を出ている。屋敷は御殿・長屋が半潰れ、大破損で、全壊と同じようだと言っているところから、藩邸は全壊状態であったと見るべきであろう。

この地震を報道した「安政見聞誌」の深川仲町騒乱図（一）には、倒壊家屋が炎に包まれる中を逃げまどう民衆が見え、「同北方徳右衛門町焼る、此辺武家町屋方同断、同所河岸石垣悉崩る」とある。深川徳右衛門丁に黒石藩邸があり、町内で火災が発生しているが類焼は免れている。

また、歌川国芳が手がけた「四ッ目ヨリ天神川通リ堤上ニテ江戸ノ方ヲ見ル」挿絵には、四ッ目から江戸の町で火炎の上がるのを見ている。ここから竪川と交叉する横川に架かる南辻橋を渡ると、三ッ目橋の黒石藩江戸屋敷に至る。飛脚はまさにこの二枚の絵図に描かれた光景を見ながら、江戸を発っていることになる。

弘前藩邸については、次のようにある。

同東方相生町四丁目ゟ五丁目、緑町一丁目二丁目まで焼る、同所河岸石垣崩、同北方津軽様中やしき迄の内小屋敷大破損崩等多し、

また、「江戸日記」同一〇月二日に次のようにある。

一、御屋敷四方出火ニ候得共、御近火者向屋敷裏御旗本焼、既ニ作事長屋江移り候処、御徒共ニ而取防申候、西御門向御旗本燃上り、是も御屋敷面々ニ而取防申し候、

緑町二丁目には弘前藩上屋敷があり、通路を隔てて向屋敷、三筋隔てて三ッ目中屋敷があり、建物被害と死傷者の大きかったのが向屋敷であった。周囲が火に包まれる中、作事長屋への延焼を懸命にくい止めている状況がわかる。

高橋家は屋号を米屋と称する黒石藩の御用達で、六代円次郎は藩士に取り立てられ、安政四年に死亡している。前町（黒石市）に分家した弟伝治郎辰房が「永代日記」を残した。[23] 初めに津軽家の系譜を書き、天文一〇年（一五四一）から明治八年までのものである。辰房は文政八年七月四日の生れなので、編纂物であるが幕末から明治初年は同時代の史料として取り扱ってよいと考える。この日記には次のようにある。

十月十二日の夜九ッ時、江戸表ゟ早飛脚九日振ニ而着、去二日夜四

時ニ大地震、諸大名様御殿并長屋共潰連、爰元江戸表御屋敷同様、黒石藩の飛脚の情報は、黒石藩邸も諸大名と同じように破損していると伝えている。

第二に人的被害をみていく。幕府には死者は家中の男子一人と中間二人の計三人であり、怪我人は二人と届け出ている。「金木屋日記」同一一月二四日に次のようにある。

江戸黒石御屋敷大地震之節死亡人左ニ、常府雄野平太夫倅壱人、雇奥小使壱人、同手廻り壱人、〆三人、外ニ怪我人奥女中弐人、内壱人者極大病之由、雇手廻弐人之内壱人者極大病之由、

常府雄野平太夫とあるのは、文久元年の「分限帳」にある高三五石・椎野平太夫と姓を間違えたものであろう。[24] 椎野は江戸詰のため家族と同居しており、江戸に菩提寺を持っていてここに倅を埋葬したものとみられる。中間は雇奥小使いと手廻の二人であるが、江戸で雇った武家奉公人であるため、平常時であれば死体は身元引受人の人宿へ渡されるが、この時はどのように扱われたかは不明である。江戸藩邸には、弘化四年（一八四七）、御目見得以上の藩士三三人の存在を確認できるが、御目見得以下と奥女中・又者の人数は不明である。[25] この地震で二六六諸藩のうち、死傷者を出したのが一一六藩で、おおよそ半分弱になる。黒石藩邸では出火・延焼もなく、死者三人であったことは、人的被害が少なかったことになる。

弘前藩では死者八一人の内、江戸雇いの者を含めて三〇人の埋葬場所を藩庁が確保している。跡式相続も緩和して取り扱い、地震のもたらした状況に対応している。

藩主承叙と一〇代承保の養女岩姫については、「金木屋日記」に次のような記事がある。

①安政二年一一月六日条

江戸大地震之節、黒石殿様御先キニちゃんと御庭江御退キ被遊居候由、夫ゟ御近習共出候而御庭ニ下候処、町者の大入道参り、さっと抱ひ出し候と被仰候由、御高運之御方神之後ミ御加護なるべしと皆々申居候由、此度御下向追々者とふて御本家御家督ニも可相成、千五百石御家門直記様の御二男様之御事、御殿潰れ候へ共御怪我も不被為在候、旁御運之能キ御方也、

②同一一月二四日条

上様ニ者御居間ゟ御立退、表座敷江御逃ニ遊候処、相潰候よし、然共御気軽ニ御逃出ニ遊候由、御姫様ニ者潰れ家御下タニ相成、奥老女御付添有之、屋根を痛め御差出申上候由、此老女相応之怪我ニ被成候よし、御供下たり之衆被申候者咄候ニも恐ろ敷由申居よし、

承叙は、居間から表座敷へ逃げ、庭に立ち退いたところ、建物が崩壊し、その後に近習が追い付いている。本人は、逃げる途中、町方の大入道に抱えられて庭へ出たと話している。すぐ近くが両国なので、大入道と見たのは相撲取りで、これに助けられたものと思われる。弘前藩主は抱え相撲を持っていたが、黒石藩主が持っていたという記録は無い。

石澤眞人氏所蔵文書に次のようにある。[26]

添書

養父出雲守養女江私儀急婿養子願之通被仰付、未婚姻相整不申候処、去辰年八月四日右女死去仕、依之再縁奉願候儀ニ御座候、以上、

九月　　津軽御名

これは、安政六年、鳥取藩支藩・鹿野藩主池田仲立の妹千世との縁組願を幕府に出した時の添書である。承叙は津軽家の御家門直記順朝の二男であり、岩姫の婿養子となって嘉永二年、一二才で家督を継いでいる。

岩姫は、全壊した奥御殿の下敷になっていたが、屋根を破壊して救助されたものの、翌三年に二〇才で亡くなっている。九代親足には九男・四女があったが、承保・巌・岩だけが成長し、他は夭折している。巌は承保の仮養子になっていたが、弘化元年に二一才で亡くなった。嘉永二年、親足の棺前で、一五才の岩姫が兄承保の養女になることを申し渡されている。これは、親足の遺言であったものとみられる。

「金木屋日記」では怪我人は四人である。岩姫に付き添った老女と雇手廻の一人が重傷を負っているところから、幕府へ届け出た怪我人二人は、重傷の二人を指すものと考える。

三　国元の状況

これまで見てきたように、藩の飛脚が三日に江戸を立ち、国元の黒石には「西谷平兵衛日記」に一二日今暁、「永代日記」に一二日夜九ッ時、「金木屋日記」に一一日八ッ時に到着したとある。このことから、一一日の夜中に着き、一二日に町方を呼び出している。

「西谷平兵衛日記」の一〇月一二日に次のようにある。

今十二日御台所迄御呼出被仰付、右変事ニ付、急速御入用御割付金被仰付、十五日より三ヶ度割上納被仰付候連中五拾五人、十四日ニ在方御呼出、中郡山形ニ而百六人、外平内在町共都合三箱斗の御割付之よし、一統迷惑無申斗候得共、御大変事の御儀ニ付、何連も精々上納可相成様子ニ付、自分ニ而も四拾五両被仰付、十五日一度ニ上納致候

一二日に陣屋の台所に町方五五人を呼び出し、御用金の割り当てを行い、一四日に在方一六〇人、飛び地の平内の者（青森県平内町）を呼び出している。町・在方合わせて三箱が必要という。一箱が千両とみられる。

平兵衛は、一五日に一括納入したが、呼び出された町方は迷惑この上ないものの、大変事のためがんばって上納するという話になったという。

「金木屋日記」安政二年一〇月二四日に次のようにある。

黒石入五ゟ申参候、左ニ、爰元御割人数あら増聞配候而別紙ニ申上候、十五日三ノ一町方ゟ上納ニ相成、其内四五人も皆納有之、其外当座御才覚彼是九百両斗相立、十六日御用人吉村様急御登、御持参ニ相成申候、

一五日に町方の三分の一が納めたので、翌日に九〇〇両を持って、用人吉村治左衛門が慌ただしく江戸へ向かっている。

「永代日記」には次のようにある。

御普請入用金差当り御手配無御座候ニ付、御用金左之通被仰付候、

ここに列記されてある町方を表（2）にした。（　）は地震の三年前の嘉永五年屋敷間数歩割下帳によって補った。[27]

表(2)　御用金領内割り当て

町方	150両	鳴海忠左衛門（前町）		
	100両	鳴海平左衛門（前町）	鍵屋源蔵（下町）	三上長太郎（前町）
	70両	福地新助（前町）		
	60両	西屋宇兵衛（前町）	扇屋清兵衛（上町）	
	50両	乗田長吉郎（前町）	木村平吉	稲村屋長左衛門
	45両	西屋平兵衛（前町）		
	40両	森（盛）七左衛門（前町）	中林久太郎（上町）	三河屋忠吉
		山田清次郎		
	35両	石郷屋小五郎（上町）	藤野五兵衛（下町）	
	25両	三国屋仁兵衛	鳴海（稲村屋）文四郎（中町）	柳屋九兵衛
		池田屋酒店	留（冨）屋栄（永）一郎（前町）	
	20両	沢屋忠兵衛（上町）	岸屋九兵衛（横町）	柳屋才（斎）兵衛（横町）
		柳屋彦兵衛	福地平助（前町）	森（盛）松太郎（上町）
		鳴海三次郎（前町）	工藤源之	岡崎春吉
		留（冨）屋仁六（前町）		
	15両	森卯三郎	柳屋治兵衛	近江屋善左衛門（上町）
		工藤治右衛門	中村甚七	
	10両	岸屋五兵衛	山本市兵衛（前町）	米屋伝次郎
		高坂三郎兵衛	木村栄助（前町）	高井伊兵衛（前町）
		須藤安之丈		
	8両	北山平四郎（山形町）	寺山久左衛門（中町）	山形屋吉左衛門
		柳屋七兵衛（横町）	近江屋与三郎（下町）	
	5両	山崎善太郎（下町）	才（斎）藤佐助（上町）	玉田伝助（下町）
		森（盛）亥之松（山形町）	鳴海久蔵（中町）	佐藤市五郎（前町）
		吉屋徳助（山形町）		
計	1490両余			
在方	70両	熊沢与兵衛		
	60両	花田清之丈	高木仁左衛門	左衛門四郎（花巻）
	30両	須藤勘四郎		
	他			
計	700両位			
平内				
計	500両			
合計	2690両余			

下町は元町（黒石市）になる。鳴海文四郎は、天保一〇年の「黒石酒屋覚」には柳屋藤右衛門の跡で造高二〇〇石の酒屋を営んでいる。これには、柳屋斎兵衛・池田屋太郎兵衛の名前もある。[28] 文四郎の屋号が稲村屋であるので、なぜ長左衛門の方が名乗っているのかわからない。池田屋酒店は池田太郎兵衛になる。柳屋七兵衛は、松井姓を名乗り、近年まで横町で七兵衛様薬局を営んでいた。天保・弘化期（一八三〇～一八四七）から明治初年までの分限を挙げた「持丸長者鑑」には、東の前頭七枚目に鳴海長左衛門、一〇枚目に鍵屋源蔵の二人が挙がっていて、共に豪商であったことがわかる。[29] ここに、米屋を名乗る高橋佐右衛門の名前が無い。佐右衛門は高橋家六代円次郎で、黒石藩士に取り立てられてから名乗っている名前である。[30] そのため町方の名簿になく、御用金割り当てから除かれたものとみられる。高木仁左衛門は飛内村（黒石市）の庄屋である。[31]

御用金割り当ては、町方で一四九〇両、在方で七〇〇両、平内で五〇〇両、合計二六九〇両になる。一二月二〇日頃には家老境形右衛門が、復興のため江戸へ向かう予定を立てている。

この外、米穀の津出しを行っていることが、「国日記」安政二年一二月二七日にみえる。

勘定奉行申出候、黒石様ニ而江戸屋敷住居向手入、旁入用相嵩不得止事、買入米之上蜆貝蔵元に而払米いたし度ニ付、七百石増津出之儀ニ付、又々別紙之通申出難被仰付筋ニ者御座候得共、此度之変事ニ付、入用増候趣、不得止事相聞得、且明年ニ至御扱向不申出候趣共、別紙申出之趣茂御座候間、当年限格段御沙汰を以御聞届被仰付候様、

左候者決而後例ニ不相心得候様共被仰付候様、右之趣私共ゟ可申通
旨申出之通申付之、

黒石藩は弘前藩より内分知を受けているため、本藩・支藩が一つの経済圏にあった。黒石藩から弘前藩へ廻米の願書を提出、用人から家老の認可を受け、留守居組頭が湊御印紙を青森町奉行に示すことで実行される手続きがとられていた。このため、黒石藩は買米をして、青森蜆貝町（青森市）に所有する蔵から七〇〇石を廻米する許可を得たものである。これによって得た代金を復興費用に充てていることがわかる。

幕府は諸大名に対し、屋敷の建て替えに布令を出している。「国日記」安政二年一二月一七日に次のようにある。

此度地震并類焼等いたし候万石以上之面々、居屋敷普請等銘々之家格ニ不抱手軽ニ普請可致、門抔茂冠木門等いたし、当分之内者板屋根等ニ而差置、如何様麁末ニ候とも不苦、万石以下之面々茂右ニ準じ可也、雨露を凌候迄ニ手軽普請可致置儀也、

手軽に普請するようにとの内容である。黒石藩邸は、安政六年に大書院、文久二年に二・三の間付きの大書院・小書院が確認できるので、承叙に池田家より千世が輿入の際には復興が成ったものとみられる。[32]

黒石藩主の帰国についてふれる。「国日記」安政二年一〇月二〇日に次のようにある。

一、黒石役人唐牛儀右衛門申出、
左ニ、
本次郎儀、去ル朔日御老中様御連名之依御奉書、登城被仕候処、
屋形様御名代在所江之御暇被仰出、拝領物被仕候段、今便申来候、
此段申上候、以上、
十月　唐牛儀右衛門
御本家様ゟ御呼出ニ而御渡候、阿部伊勢守様ゟ御渡御書付之写、
左ニ、
津軽御名
其方儀、病気ニ付、願之通為名代津軽本次郎在所江被下御暇候間、
蝦夷地御用為相心得候様可被致候、御本家様御不快ニ付、御願之
上被遊御滞府、此度為御名代被罷下候間、松前表御警衛向之儀、
猶又念入候様被仰出候、

ここには、二つの内容がある。一つは、地震の前日、藩主承叙が江戸城で老中より、病気の弘前藩主の名代として在国を命じられたものである。[33]もう一つは、幕府より弘前藩主に対して、名代として黒石藩主を蝦夷地警備の役務にあたらせるというものである。この年三月、病気の弘前藩一一代藩主順承の名代として世子承祜が帰国したが、病没したところから黒石藩主に命じたことになる。これには不測の事態における軍事指揮権を含む重大な役務を負っていた。黒石藩主は地震の一〇日後の一〇月一二日に江戸を出発し、千住・草壁では人馬の用立てに苦労している。名木沢（尾花沢市）で弘前藩の飛脚が追い越している。「金木屋日記」には、弘前藩馬廻組頭・用人竹内又市が、黒石藩主に付き添って国元へ向かったとするが、「江戸日記」には一〇月二二・二六日は藩政の当番にあたっており、一一月一日には弘前藩主へ機嫌伺いに出ているので、この情報は間違いである。[34]藩主に付き添って黒石に向かったのは、黒石

藩家老境形右衛門であった。[35] 黒石藩主は二三日をかけ、一一月五日に黒石に着き、陣屋・中の口入側に領民を並ばせ御目見を許している。[36] 弘前藩庁は、蝦夷地警備の役務をもった藩主名代の承叙の初入部に際し、手廻小山内純之進を使者に立て進物干鱈一箱を贈っている。また、松前藩へこの名代到着を知らせている。[37] 承叙は、仏参を隔月とし、初午の赤飯の下賜を取り止めるなど大幅な省略を行い、さらに、弘前藩の了承を得て買米・津出しによる復興費の捻出に取り組んでいることがわかる。

おわりに

この地震での黒石藩邸の建物被害は、無事であったのが表・裏門、作事小屋だけであり、ほぼ壊滅状態であったとみられる。人的被害は、火災の発生がなく、延焼も免れたので、死者三人・重傷二人と災害規模のわりには少なかった。この内容は幕府への届出と災害情報から知ることができた。

藩用の飛脚は、一一日の夜半には国元に到着しており、当時としては驚くべき早さで情報を伝えていることがわかった。

藩邸の復興資金は、国元の町・在方に対する御用金割り当てと回米によっていることが明らかになった。

「弘前藩庁日記」の記載と、弘前・黒石両藩の飛脚のもたらした災害情報を考察し、「金木屋日記」の情報の一部に誤りのあることが指摘できた。

今後は、国元の明和三年（一七六六）の地震など災害史の中で検討されていく必要があると考える。

註

(1)『地震の社会史―安政大地震と民衆―』、講談社文庫、二〇〇〇。『近世災害情報論』、塙書房、二〇〇三。『地震の社会史―安政大地震と民衆―』、吉川弘文館、二〇一三。

(2)『安政江戸地震災害史』、上・下巻、海路書院、二〇〇四。

(3)「秘日記から見た安政江戸地震」（『歴史地震』第二一号）、二〇〇六。

(4) 拙稿「弘前藩江戸藩邸における死者とその扱い（上・下）」（『弘前大学國史研究』第一三一・一三二号）、二〇一一・二〇一二。

(5) 弘前市立弘前図書館蔵。

(6) 高橋幸江氏蔵「御家譜」。

(7) 弘前市立弘前図書館蔵。

(8) 森林助『津軽黒石藩史』、歴史図書社、一九七六。

(9)『新訂寛政重修諸家譜』第七二六、続群書類従刊行会、一九六五。

(10) 国文学研究資料館蔵。

(11) 内閣文庫所蔵史籍叢刊第一四巻、汲古書院、一九八二。

(12)『復元・江戸情報地図』、監修児玉幸多、朝日新聞社、一九九四。

(13) 弘前市立弘前図書館蔵。『新編弘前市史資料編3（近世編2）』、弘前市企画部企画課、二〇〇〇。長谷川成一『弘前藩』、吉川弘文館、二〇〇四。

(14)『嘉永・慶応江戸切絵図』、人文社、一九九五。

(15) 高木保子氏蔵。

(16) 拙稿「高木久蔵の道中日記　嘉永三年（一八五〇）について」（『東北女子大学・東北女子短期大学紀要』第五〇号）、二〇一一。

(17) 坂本寿夫『弘前藩記事五』、北方新社、一九九四。

(18)「安政見聞記」（早稲田大学演劇博物館浮世絵閲覧システム）。荒川英俊『実録・大江戸壊滅の日』、教育社、一九八二。これとは別に斎藤月

岑による同名の編著がある。丹野美子「江戸町名主斎藤月岑の地震記編集―江戸東京博物館蔵『安政見聞誌』をめぐって―」（『東京都江戸東京博物館研究報告』第一四号、二〇〇八。

(19) 斎藤月岑著、平凡社、一九六八。

(20) 前掲『近世災害情報論』、塙書房、二〇〇三。

(21) 萩野看生子「金木屋日記に見る金木への仏参」（『北奥文化』第三四号）、二〇一三。

(22) 青森県立図書館蔵。

(23) 高橋幸江氏蔵。

(24) (25)『黒石市史資料編Ⅱ』、黒石市、一九八六。

(26) 石澤眞人氏所蔵文書は表紙が失われているが、内容から安政六年の承叙の縁組に関する御用留であることがわかる。

(27) 黒石市史編纂委員会収集資料、黒石市教育委員会蔵。

(28)『黒石市史通史編Ⅰ』、黒石市、一九八七。

(29) 弘前市立弘前図書館蔵。

(30) 高橋幸江氏蔵「遺書高橋佐右衛門」。

(31) 高木保子氏蔵「従御上様代々被仰付記」。

(32) 前掲（26）。同氏蔵「御滞府御願一件」。

(33)「柳営日次記」安政二年一〇月朔日条（国立国会図書館デジタル資料「年録　五一七」）。

(34)「江戸日記」安政二年一〇月二二・二六日、一一月一日条。

(35)「国日記」安政二年一一月六日条。

(36) 石澤眞人氏蔵「年中行事調」。

(37)「国日記」安政二年一一月一〇日条。

（しのむら・まさお　弘前大学國史研究会員）